加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="3">団体名</td><td>和</td><td>国際科学史技術史・科学基礎論連合/科学史技術史部門</td></tr>
<tr><td>英</td><td>International Union of History and Philosophy of Science and Technology / Division of History of Science and Technology
（略　称　IUHPST/DHST）</td></tr>
<tr><td>団体 HP（URL）</td><td>https://dhstweb.org/
（日本学術会議が加盟していることの記載 (有) ・　無　）
https://dhstweb.org/structure/ordinary-members 参照</td></tr>
<tr><td colspan="2">国際学術団体における最近のトピック
（学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等）</td><td>DHST は DLMPST とともに ISC 傘下のメンバー・ユニオンである IUHPST を構成する国際学術団体であり、その傘下に科学史・技術史・医学史の分野における各専門領域を対象とする 23 の分科会（国際委員会）を有している。DHST と DLMPST は２つの部門として分かれるが、両者を橋渡しすること目指して科学史・科学基礎論の双方に関わるテーマを追求する合同委員会（DHST-DLMPST Joint Commission）が 2015 年頃から活動を開始し、現在も活発に活動を続けている。
以下 DHST の活動の最近の動向やトピックを述べる。
＜グローバル・デジタル・フェスティバルの開催＞
2021 年度から情報発信に関心をもつ新会長マルコス・クエト氏の下、同様の関心をもつ若手評議員が新たな企画を提案してくれている。その一つが、全世界的に 24 時間連続して開催したオンライン講演会議である。参加者は DHST に所属する各国からの代表と各分野の国際委員会からの代表で、メインテーマである「科学技術史の未来／未来のための科学技術史」をめぐりそれぞれの参加者が自らの立場から約 20 分の講演をしてくれた。2023 年の 9 月 29 日から 24 時間かけて開催されたが、世界各地の視聴者は 24 時間のうち都合のよい時間に参加し視聴してもらった。各講演は録画され、英国科学史学会の協力を得て、YouTube で視聴できるようにされている。本企画についての説明は以下のサイトにある。
< https://dhst-festival.sciencesconf.org/>
また YouTube の再生リストは以下のサイトにある。
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeX-iQUe-OPodxfRUrcyRpMIy_XgMf-XN>
本会議はその後の録画の視聴回数も多くはないが、挑戦的で将来性をもつ企画だったと思われる。
＜SNS での情報発信＞
また新会長の方針により、DHST の活動を SNS で発信するようになった。Mastodon、Facebook、X などのソーシャルメディアの以下のサイトで DHST 関連の活動を発信している。
＜https://mastodon.world/@iuhpst_dhst＞
＜https://www.facebook.com/iuhpst.dhst/＞
＜https://x.com/iuhpst_dhst＞
＜新設の委員会＞</td></tr>
</table>

	DHST は DLMPST と連携して学術研究活動を続けているが、両部門の関心から科学教育をテーマとする委員会の新設が進められている。新委員会は「IUHPST Commission on Education and Science」と名称され、2023 年の DLMPST の総会で新設が承認され、2025 年の DHST の総会での審議を経て正式に発足し活動を開始する予定である。 ＜国際機関との関わり＞ ISC には DHST と DLMPST が構成する IUHPST の代表が投票権をもつメンバーとして総会に出席するが、DHST・DLMPST に関係する研究者が ISC の常設委員会で活動している。隠岐さや香氏（本分科会委員長）が ISC の Standing Committee for Freedom and Responsibility in Science に、Jahnavi Phalkey 氏（DHST 評議員）が Standing Committee for Outreach and Engagement に、Sandra Mitchell 氏（DLMPST 第一副会長）が Standing Committee for Science Planning に、2022 年から 2025 年までそれぞれの委員として務めている。
当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例	DHST の傘下には現在 23 の分科会（国際委員会）が活動しているが、各分科会への支援にあたって活動状況を伝えるウェブサイトの整備を促していることもあり、各分科会のウェブサイトは大変整ってきており、そこで各分科会の活発な活動状況を知ることができる。 その例として、「科学技術と外交」委員会では、多くの学術誌での特集号の企画と出版を支援しており、最近では「科学技術と国際問題」というテーマで学術書のシリーズを出版する計画を打ち出している。また「気象学史」国際委員会では、2024 年 8 月に開催された 1970 年代の気候変動の研究と言説に焦点を当てたシンポジウムの報告をウェブサイトに掲載している。温暖化・気候変動を考察する際に 1988 年に設立された IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change）とその後の活動に関心が向かいがちだが、同シンポではそれに先立ち気候問題・環境問題への強い関心を喚起しその後の議論と運動を生み出した 1970 年代の状況を分析して論点を整理しようとしたものである。 物理学史の委員会も最近になり DHST とともに物理学・応用物理学のユニオン（International Union of Pure and Applied Physics : IUPAP）との共同傘下の Inter-Union Commission for the History and Philosophy of Physics (IUCHPP)に再編され、活発な活動を続けている。直近では IUPAP の歴史の調査研究プロジェクトが進められていたが、その成果が *Globalizing Physics: One Hundred Years of the International Union of Pure and Applied Physics* としてオックスフォード大学出版局から 2024 年 9 月に出版された。同書はオープンアクセスの論文集であり、同委員会のウェブサイト＜https://www.iuchpp.org/iupap-history-project＞で紹介され、そこから出版局のサイトに行き pdf 版へのアクセスが可能である。 上記以外の分科会もすべてウェブサイト上で最近の活動を報

	告している。それらは分科会の性格に応じて 4 種に分かれ、次の４つのサイトにリストがあげられ、そこに各分科会の会長名とともにウェブサイトへのリンクが貼られている。 ＜https://dhstweb.org/structure/inter-union-commissions＞ ＜https://dhstweb.org/structure/historical-commissions＞ ＜https://dhstweb.org/structure/inter-division-commissions＞ ＜https://dhstweb.org/structure/scientific-sections＞ DHST では各分科会への支援とともに、隔年で優秀な博士論文の表彰を行っている。博士論文は、西洋・アジア・イスラム圏の３地域における科学史・技術史・医学史を対象とするものであり、最近では、西洋科学史では 19 世紀の英国の女性数学者メアリ・ソマヴィルの科学的業績を分析した優れた研究、東アジア科学史では近世の日韓植物学史の比較研究、イスラム科学史では 13-14 世紀のシーラーズィーの地理天文学書の研究などが選ばれている。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等	2013 年に DHST が提出したマンチェスター宣言は、DLMPST が 2015 年に提示したヘルシンキ宣言とともに、時折計画や活動の推進に参照されている。 DHST の特徴として、欧州と米国だけでなくアジア・オセアニア・中南米などの世界各国のメンバーが参加しており、それらの諸国に関連する科学技術医学の歴史の研究も積極的に進められ研究者間の交流がなされている。DHST は 2017 年にブラジルで国際大会を開催し、その後 DHST 会長に就任した Marcos Cueto 氏はペルー出身でブラジルで活動する医学史研究者であり、事務局次長として業務にあたっている Thomás Haddad 氏もブラジルの大学の研究者である。実際、科学史の分野で、中南米の科学史の研究、特にコロンブスの新大陸発見後の新世界と旧世界をめぐる科学史・技術史・医学史の研究は次々に新しい研究が出されており、グローバルな観点からの近代以降の科学技術医学の歴史研究が盛んに研究され続けることが予想される。 比較的最近に設立された「コンピューティングの歴史哲学委員会」は、2024 年 6 月に下記のように日本でのワークショップの開催に協力してくれているが、10 月には下部組織の「プログラミングの歴史哲学」グループが英国ケンブリッジにおいて AI を含むコンピュータ・プログラミングにおける「公正と偏向」を主題にしてワークショップを開催した。AI やコンピューティングに関連する研究は今後他分野の研究者とも連携をとりながら盛んに進められていくだろうと思われる。また同委員会ではフェスティバルにおいても代表が講演をしてくれているが、そこで今日の状況と類似の状況が過去にも生じていたことに目を向け、過去を見ることで状況が錯綜し複雑だったことを指摘し、歴史研究の便益を述べている。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例	若手評議員らによる企画であるが上記のフェスティバルについては、日本からも評議員の橋本が時間枠で司会を担当するとともに、分科会の委員である杉本舞関西大学准教授（当時）が参加して日本の科学史教育の歴史と現状に関して講演してくれた。また DHST と DLMPST の Inter-Division　Commission である

	計算の歴史哲学委員会（History and Philosophy of Computing：通称 HaPoC)は、日本の科学史学会と科学基礎論学会との共催で「コンピューティング・アルゴリズム環境の科学・技術史と哲学」というテーマで 2024 年 6 月にワークショップを日本で開催し、HaPoC 役員の Henri Stephanou 氏とともに本分科会の委員である杉本舞氏が招待講演を行い、日本人研究者らとディスカッションを行った。 日本人役員によるイニシアティブ事項としては特記するものはないが、前回のオンライン開催での国際大会での経験から申請手続きにおける改善要求を申し入れたことがあり、今回の 2025 年ニュージーランドで開催予定の国際大会に向けての手続きでは丁寧な対応がなされるようになっている。また国際プログラム委員にも就任することで、招待講演者の選定などで大会の準備に協力しているところである。 また評議委員としては、通常の業務（優秀博論審査、分科会申請査定、次期大会準備など）に加え、新規企画の実行・新委員会の設置・国際情勢への対応などの補佐と協力を行い、とりわけ事務局長の療養中は作業量が増した事務局次長を補佐して業務に支障が生じないよう心がけた。
当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化	DHST の傘下には多くの専門分野に分かれた科学史（並びに技術史・医学史）の国際委員会があり、日本の多くの科学史研究者もそれらの国際委員会の活動に参加し便益を受けている。地質学史・化学史・古代中世天文学史・イスラム科学史・東アジア科学史などで役員も務めており、DHST から支援を受け連携して活動を続けている。 ４年に一度開催される国際科学史会議にはこれら各分野の日本人研究者も多数参加するが、そのための情報を適宜回覧しているところである。2021 年の国際会議はすべてオンライン会議となり、2025 年の会議はハイブリッドになる予定である。2022 年 5 月には日本科学史学会の年会において DHST の現会長であるマルコス・クエト氏がラテンアメリカ科学史研究の現状に関してオンラインで講演をおこなってくれ、また上記の通り 2023 年 9 月にグローバル・デジタル・フェスティバルがオンライン上で開催され、日本の研究者も多くが閲覧してくれたと思われる。 科学史研究者がこれらの国際的な交流を通じて得た科学史の知識・情報を学会活動と出版活動を通じての国民に提供していることが大きなメリットであると考えられる。 また、上記のように本分科会委員長の隠岐さや香氏は ISC の「科学における自由と責任」常設委員会の委員になっているが、同委員会には他に世界的に著名な科学史や生命倫理の研究者も加わっている。他の常設委員会でも DHST と DLMPST に深く関係する研究者が加わっており、両団体に加入していることにより連絡や情報交換の経路をもっていることの潜在的な利点は小さくないと思われる。
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の	本国際組織は、全世界の若手研究者の博士論文の研究に２年に一回賞を与えている。（以前は４年に一度であったが、より頻繁に機会を与えるために２年に一度に改正された。）

基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	DHST から分科会の活動への資金援助がなされているが、それらはウェブサイト構築・運営とともに、若手研究者への支援を重視して与えられるようにされている。コロナ禍以前はしての会議参加の旅費に当てられる傾向があったが、コロナ禍以後は若手研究者の学会運営への協力、若手研究者が母体となって企画する研究集会などに支援を与えるようにしている。 また傘下の「科学技術と外交」国際委員会が企画してきた若手研究者のためのワークショップを DHST が後援して 2025 年前半に開催する予定になっている。これは書評、オラルヒストリーのためのインタビュー、論文投稿、論文執筆などについて中堅以上の研究者が若手研究者に講演してアドバイスを与える企画になっている。 DHST では 2021 年の総会において、ジェンダーや人種、エスニシティにおいて多様な研究者が集う場でのハラスメントやそれに類する行動を抑止するための「Respectful Behavior Policy（尊重し合える行動の指針）」が提案され、それについて協議を続けて修正版が作成され、2024 年 9 月から 10 月にかけて開催された臨時総会での審議を経て、10 月の投票で可決されたところである。そこでは一般的な「ハラスメント」の定義、該当案件が生じたときの通報やその後の手続きが定められてあり、特徴としてオンブズパーソンを指定するとともに調査委員会の設置が指示されている。

2　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）	現在、理事会（評議会）は頻度を増してオンラインで開催されるのが通例になっており、日本で開催する予定はない。また総会についても現在のところ招致して開催する予定はない。
日本人の役員立候補等の予定	2025 年度の総会で次期評議員の選挙がなされるが、その選挙のための各国会員への推薦依頼を受け、杉本舞氏（関西大学教授）を日本からの評議員候補として DHST 選挙委員会に推薦した。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き	現在のところ、特記すべき日本からの提言やプロジェクトの計画はないが、フェスティバル開催、ソーシャルメディアの情報発信、情報担当役員職の新設などがなされる中、ホームページのウェブサイトのさらなる改善と充実を提言するとともに、日本側でのこれらの各種の情報の利活用を検討していきたいと考えている。

3　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の	総会開催状況	2017 年（開催地：リオデジャネイロ） 2021 年（オンライン開催） 2023 年（オンライン開催）（11/30 に臨時総会開催） 2024 年（オンライン開催）（9/18 と 10/1 に臨時総会開催） 2025 年（開催地：ニュージーランド・ダニーデン）

<table>
<tr><td rowspan="3">状況
（過去５年間及び今後予定されているもの）</td><td>理事会・役員会等開催状況</td><td>2019 年（開催地：プラハ）
2020 年（オンライン開催）
2021 年（オンライン開催）（7/24、8/1、12/9、12/10 の 4 回開催）
2022 年（オンライン開催）（12/9、12/10 の 2 回開催）
2023 年（オンライン開催）（6/22、11/7、12/11 の 3 回開催）
2024 年（オンライン開催）（4/24、10/2 の 2 回開催、また 12/9 に開催予定）
以上のように 2020 年以降はすべてオンライン開催になっている。それまで年に 1 度 8 時間ほど時間をかけて行っていたが、20021、2022 年には 4 時間ほどを 2 日に分けて開催した。2023 年からは 12 月だけでなく別の時期にも適宜開催することで、12 月の開催時間を減らすようになった。全体としては評議会の開催時間数は増加している。
また 2022 年には 6/2 と 10/27 に、DHST に所属する各メンバー国や各分野の国際委員会の代表とのオンライン相談会を開催し、DHST が支援する項目の内容、若手支援のあり方、ウェブサイトの維持編集の作業などについての質疑応答がなされた。</td></tr>
<tr><td>各種委員会開催状況</td><td>DHST の下では 23 の分科会が活動している。各分科会が各専門分野の国際学会として活動し、多数の国際会議を開催している。これらの国際会議については、次の項目の説明を参照。
DHST の下での事務的な委員会は評議会委員の選挙を準備する選挙管理委員会や若手研究者を対象とする博士論文賞選考委員会などがあり、前者は 4 年ごとの国際大会の前年に、後者は隔年に開催される。</td></tr>
<tr><td>研究集会・会議等開催状況</td><td>DHST の下での 23 の分科会の活動をここにすべて記載することは不可能である。それらの多くは、各専門分野の国際学会として活動し、上記の DHST の国際大会に合わせて会議を開催するとともに、その間の概ね年に一回ないしは数回の会議を開催している。各分科会の活動はそれぞれのウェブサイトをもつようになっており、それらのウェブサイトのアドレスは上記の DHST のウェブサイト< http://dhstweb.org/>の中に記載される各分科会のリストに記されている。</td></tr>
<tr><td colspan="2">上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定</td><td>2021 年第 25 回国際科学史技術史大会　約 30 人（オンラインのため旅費支給の日学代表派遣の形はとらなかったが、総会議決権者として、木本忠昭（日学代表）、橋本毅彦（DHST 役員）、市川浩、奥田謙造の各氏が日本代表者となった。）
傘下の国際委員会のうち、役員を務めているのは以下の通りである。菊地好行氏（愛知県立大学教授）が化学・分子科学史国際委員会副会長（2021 年-25 年）、三村太郎氏（東京大学准教授）がイスラム社会・科学技術史国際委員会副会長（2021 年-25 年）、塚原東吾氏（神戸大学教授）が東アジア科学技術医学史国際委員会会長（2024 年-27 年）をそれぞれの任期で務めている。</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去５年）</td><td>役職名</td><td>役職就任期間</td><td>氏名</td><td>会員、連携会員の別</td></tr>
<tr><td>事務局次長</td><td>2017～2021</td><td>橋本毅彦</td><td>(23,24,25 期）連携</td></tr>
<tr><td>第一副会長</td><td>2021～2025</td><td>橋本毅彦</td><td>(25,26 期）連携</td></tr>
<tr><td>出版物</td><td colspan="4">DHST では定期・不定期の刊行物を出版していないが、傘下の 23 の分科会では活発に定期的刊行物を発行するとともに、ウェブサイトやソーシャルメディアで情報を発信している。
傘下の分科会は 4 種に分かれてそれぞれの情報が上記のようなウェブサイトにリス</td></tr>
</table>

	トされているが、たとえばInter-Union Commissionの国際地質科学史委員会は、1967年から2023年までの年次報告を次のサイトにあげている。各年次報告には各国の研究動向や関連情報が記載されており2023年版は281頁の長さがある。 ＜https://www.inhigeo.com/annual.html＞ またScientific Sectionの一つの国際技術史委員会では*ICON*と題する雑誌とニュースレターを出版しているが、*ICON*は一部、ニュースレターは全ての内容を次のウェブサイト上で公開している。 ＜https://www.icohtec.org/＞

活動状況が分かる年次報告等があれば添付又はURLを記載

現在までのDHSTの活動については、主として＜https://dhstweb.org/＞を参照。

また上記の通り、Mastodon、Facebook、Xなどのソーシャルメディアでも以下のサイトでDHST関連の活動を発信し始めている。＜https://mastodon.world/@iuhpst_dhst＞、＜https://www.facebook.com/iuhpst.dhst/＞、＜https://x.com/iuhpst_dhst＞

DHST のウェブサイトの中の＜https://dhstweb.org/documents/general-assembly-council-meetings＞には、2005年から2021年までの4年ごとの大会に合わせて開催される総会の議事録と、2009年から2023年まで開催された評議会の議事録が掲載されている。

最近の総会と評議会の議事録のURLは以下の通り。

2021年プラハ大会での総会議事録
＜https://dhstweb.org/wp-content/uploads/2021/09/2021-GA-Minutes.pdf＞

2021年評議会議事録
<https://dhstweb.org/wp-content/uploads/2022/01/Minutes-of-the-DHST-Council-Meeting-december-2021.pdf>

2022年評議会議事録
<https://dhstweb.org/wp-content/uploads/2023/02/Minutes_council_meeting_2022_draft1_LDM-1.pdf>

2023年評議会議事録
<https://dhstweb.org/wp-content/uploads/2023/07/2023_6_22_DHST_council_meeting_minutes.pdf>

また、DHSTとDLMPSTから構成されるISCのメンバー・ユニオンであるIUHPSTの活動については、以下のウェブサイトが存在する。＜https://iuhpst.org/＞

４　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第３条、４条、５条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規４条第３号）</td><td>委員会名</td><td>史学委員会 IUHPST 分科会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>隠岐さや香</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
第 26 期　第１回　令和５年（2023 年）11 月 26 日
委員長を選出し今後の方針を確認した。
第 26 期　第２回　令和６年（2024 年）5 月 16 日
DHST 評議会の選挙手続き改正について報告、次回臨時総会の開催が変則的であるため周知徹底をはかった。
科学史学会国際会議（ICHST）2025 年度大会についての広報のあり方を審議した（日本科学史学会に広報を依頼）
DLMPST の Executive Committee Meeting が１月８日に、評議会が１月９日と 11 日にいずれもオンラインで開催されたことが報告された。
第 26 期　第３回　令和６年（2024 年）8 月 30 日
DHST の評議会と臨時総会の審議内容について情報共有、Respectful Behavior Policy、選挙での推薦手続きの改善について審議し、日本側の意見を集約した。
DHST の評議員の推薦について、候補者を一人選定した
DLMPST の活動として、上記のように HaPoC と国内学協会との共催ワークショップが開催されたこと、また８月にローマで開催された世界哲学コングレスにおいて DLMPST 主催の招待パネル「Should Scientists Listen to Philosophers」を開催し、DLMPST の第二副会長である岡田氏がパネリストを務めたことが報告された。
第 26 期　第４回　令和６年（2024 年）11 月 13 日
DHST 臨時総会報告および代表国際派遣手続き等について審議した。DLMPST 活動については、9 月に開催された CIPSH 設立 75 周年会議で岡田副会長が基調講演を行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内規第３（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
(1.)該当する　　２．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載（http://www.　　）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）
(1.)該当する　　２．該当しない
※根拠となる資料の添付又は URL を記載
（ http://dhstweb.org/documents/statutes-rules-procedure）</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="3"></td><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに〇印）

ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの

イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの

ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの

エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
<tr><td colspan="2">10ヵ国を超える各国代表会員が加入している
１．該当する　　２．該当しない</td></tr>
<tr><td rowspan="2">加入国数及び主要な各国代表会員を10記載</td><td>（４２ヶ国）</td></tr>
<tr><td>・各国代表会員名／国名
・Brazilian Society for the History of Science／ブラジル
・Chinese Society for the History of Science and Technology／中国
・Comité National Français d'Histoire et de Philosophie des Sciences et des Techniques／フランス
・German National Committee for History of Science, Technology and Medicine／ドイツ
・Indian National Science Academy／インド
・Italian Society of History of Science／イタリア
・Swedish National Committee for History of Science and Technology／スエーデン
・National Committee for History of Science and Technology for the Russian Federation／ロシア連邦
・British Society for the History of Science／イギリス
・History of Science Society／アメリカ合衆国</td></tr>
</table>

（参考）
国内関係学協会（主要６団体）
主要学協会：日本科学史学会、化学史学会、日本数学史学会、洋学史学会、日本産業技術史学会、日本医史学会